

子どもたちと考える部落差別

ある高校の入試面接で

昨年1月のことです。私が勤める中学校のある生徒が、県立高校の面接入試で「あなたが学校生活で一番印象に残っている授業について、*SDGsと関連づけて答えてください。」と聞かれたことがあります。SDGsが掲げる「人や国の不平等をなくそう」という目標と関連づけ、その生徒は「地域で起きた『差別落書き』の人権学習です。」と答えました。三人の面接官に対して自分が校区で起きた差別落書きのこと、そこで学んだことを語る子どもの姿が、そこにはありました。

*SDGsとは、世界中にある環境・差別・貧困等の社会問題を世界のみんなで2030年までに解決していくところの計画・目標

『差別落書き』の授業化に向けて

2018年2月に起きた差別落書き。私たちが授業で取り組み始めたのは、今から4年前のことです。授業をする上で、校内での議論はもちろん、地域の方々との話し合いが不可欠でした。地域の方々の思いが分かるだけに、どんな展開を考えても苦しさや怒りなどいろいろな感情がわき上りました。書いては消し、消

しては書き…という作業を、何度もくり返しました。さまざまな葛藤や迷いの中、私たちは1年以上もの時間を作り、学習内容を形にしていきました。

授業日が近づいていく中で、差別落書きのことを授業で扱うことに大きな不安が募っていました。ある時、そのことを地域の方に相談しに行くと、次のような言葉をかけていただきました。

不安もあるだろうけれど、正しく学ぶための授業なので、恐れずに授業をしてほしい。何よりこれまで人権学習を積み上げてきた生徒たちを信じて授業してもらいたいのではないか。

また、地域のある方はこのように言われました。

「先生たちにしか伝えられないことがある。先生、子どもたちをよろしくお願いします。どうか差別を許さない子どもたちを育ててください。お願いします。」

私たち授業者の「覚悟」が決まった瞬間でした。

授業の実際～これから生き方を語る子どもたち～

私たちの学校では、中学校3年間の最後の人権学習として、『差別落書き』の授業を行います。授業では落書きがあつた施設の紹介や壁に書かれた言葉について実際の写真を見せながら学習します。社会科歴史学習や人権学習で、部落差別について学んでいる生徒たちですが、事実を知った瞬間に表情がこわばる生徒もいます。しかし、今もある部落差別に対して、生徒たちなりに向き合いい、さまざまな意見を伝えてくれます。

差別を知らないと、差別をなくすことはできない

入試面接や授業で、差別に対しても自分の意見を語る子どもたちーこれらの姿は、授業を通して部落差別の現実について学んだからこそ姿です。差別をなくす力をつけるには、まずは今ある差別について知ることです。部落差別の現実に基づいた教育や啓発がいかに大切であるか、私は子どもたちの姿から学びました。

 生きていく中で、いつも自分が部落差別や他の差別と出会つか分からぬいけれど、それを目の当たりにした時に、見ないふりをして差別から逃げるようなことはしたくなじと感つた。

 見るものもつらうであろう落書きの言葉を1年10ヶ月も残すことは、私だったらとてもつらい。でも地域の人たちは、多くの人に知つてもうおうとえて残す決断をした。私はそこから「絶対に差別をなくす」強い意志を感じた。

落書きが消えても差別が消えるわけじゃない。差別をなくすことができるの、やはり一人ひとりの行動にかかっていると思う。今、自分にできることは、まだたりない知識を身につけること、差別をしない意志を貫くこと、自分が知っていることを身近な人に広めることがだ。



『差別落書き』の授業は、地域の人たちの涙や思いから生まれたものです。そこにある人の痛みやぬくもりに向き合いながら、私はこれからも、子どもたちといっしょに差別をなくす生き方にについて考え続けていきます。